



photo 藤田佳久

「ハープの響きは、細長い廊下の中でまろやかになり、奏者の願いが降りそそぐ」

## 頑張った時間が、今を生きる時間をくれる

今年も、一昨年の十二月から昨年十一月までに亡くなられた患者さんご家族をお招きしての追悼記念会を開いた。ご家族にとって一年間は長いようで短く、様々な思いで過ごされていた。

妻を亡くして一人の生活をしている夫は、「居なくなると、物のある場所がわからない」「寂しくていつも思い出している」「最期の場になぜ居てやれなかったんだろ。それだけが悔やまれる」といつも妻のことを思い、生活している。夫を亡くした妻が思い出すのは、いつも彼が口ずさんでいた「千の風になって」。気が付くと今習っているフラダンスの曲が「千の風になって」。蕎麦が大好きだった夫のため、今日も仏壇に蕎麦を供えている妻がいる。娘を亡くした母は、がんと闘った娘を誇りに思い、娘に恥じない生き方をしようと呼んでいる。皆、今亡き人と普段の生活の空気の中で触れ合っている。

### 吉村 良子・文 函館おしま病院 ホスピス病棟看護師長



よしむらりょうこ  
社会福祉法人函館厚生院函館  
厚生院看護専門学校卒業。  
平成16年函館おしま病院勤務。  
平成22年12月より同病院ホスピス病棟看護師長に就任し、現在に至る。

この会には毎年ハーピスト池田千鶴子さんを招いて、癒しのひと時を設けている。ハープの音色に様々な思いがよみがえって、そこに故郷を思い出すような温かな空気が流れ、辛い思い出が懐かしさに変わる。そして、出会った同じ思いのご家族同士が、会話の中で互いを労いあう。ただそれだけで、また明日から生きていこうと思える時間になったと言う。

池田さんは「患者さまやご家族ばかりではなく、スタッフさんも癒してあげたい」。そう言っただけでもハープを奏でてくれた。その音色に、一人またひとりと病室から顔を出す。心が落ち着くようだ。

ハープの優しい音色に何故だかずっしりと重いものを感じる。「今生きていく」という重みだろうか。患者さんもご家族もそしてスタッフも、頑張っても頑張っても後悔が後に来る。だけど頑張った時間が、今を生きる時間をくれる。